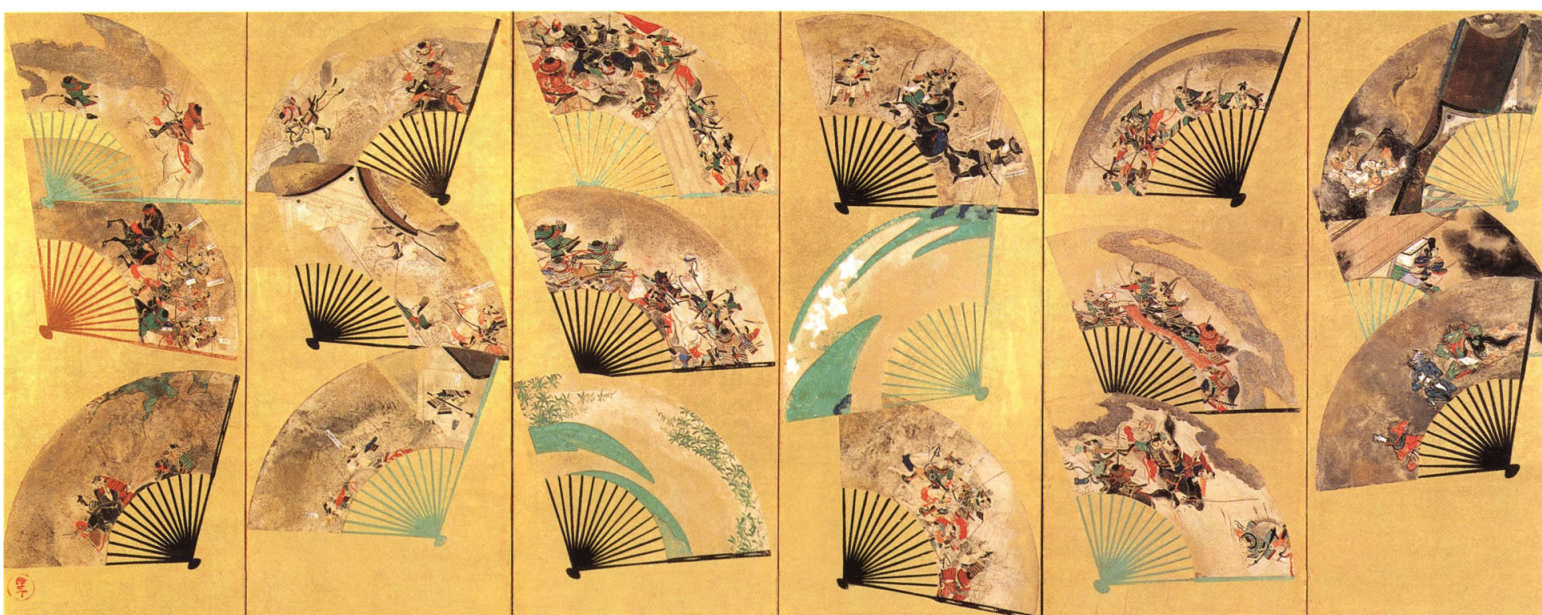
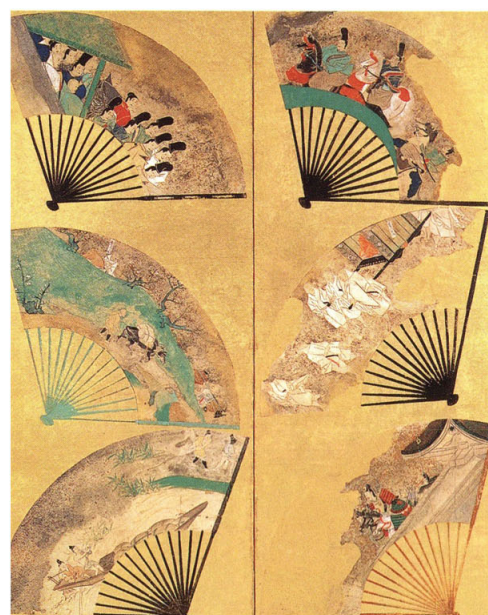


右隻



左隻



4 扇面散屏風(保元・平治・伊勢物語など) 俵屋宗達ほか 八曲一双

紙本着色 江戸時代(十七世紀)
本紙一・一・八×三七六・〇

琳派の祖とされる俵屋宗達(？一六四〇頃)とその工房画師によって描かれた扇面を、金箔地に自由な感覚で全体を一つのデザインとして配慮しながら貼り合わせた屏風である。扇絵を屏風各扇に三面つつ貼り、それぞれに墨、緑あるいは茶色の骨を金箔地に描く。合計四十八面の扇には、「平治物語絵」「保元物語絵」を中心に、「伊勢物語絵」などを交え、さらに「草花図」を加えている。それぞれに捺された印や画風、また同じ図様があることから、宗達を含め、その工房の画師の手になる数種類の扇絵を、ある時期に俵屋工房でこのような屏風に仕立てたと考えられる(各隻端には工房の主要画師が後継者へと伝えていったと考えられる「伊年」の朱文印が捺されている)。宗達と宮廷との関わりや、近年の修理によってそれまでの状態は江戸前期のものと考えられること、江戸中期の御所の屏風目録に記載されている点などから、本屏風は制作当初から御所内に伝来してきた可能性が高い。

扇は十三世紀頃には贈答の品として用いられるようになり、室町時代には、宮廷で用いられる扇は宮廷絵所預であった土佐家が調進していたことが知られる。また足利將軍家には狩野元信や芸阿弥が、さらに海北友松が八条宮智仁親王に進上していることが史料より知られる。「扇屋」を主宰した宗達が、後水尾天皇ら宮廷との関わりが深かったこともあり、この扇絵とそれを散らし貼り付けた屏風の制作事情と伝来には、十分に頷けるものがある。

この屏風は、古典文学の、おそらくは古絵巻を粉本として扇面に構図を組みなおした扇絵と五点の草花図を交え、その散らし方に洒落を染し込んだものでもある。その意匠は、まさしく古典の伝統と江戸前期の新感覚によるものであり、まさに当時の美意識が反映された作品と言えよう。



保元物語(右隻第2扇)



保元物語(左隻第2扇)



平治物語(左隻第6扇)



北野天神縁起(左隻第3扇)



伊勢物語(右隻第3扇)



草花図(右隻第1扇)

- ・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

江戸の美意識 — 絵画意匠の伝統と展開

三の丸尚蔵館展覧会図録 No. 28

編集 宮内庁三の丸尚蔵館

制作 株式会社 東京美術

翻訳 横溝廣子

発行 宮内庁

平成十四年三月二十六日発行

©2002. Museum of the Imperial Collections